

# ちょっと読んでみませんか（令和五年お盆）

## 第68話『“浮力”に身を委ねる』 ～本源寺副住職 本間健司

「溺れる者は藁（わら）をも掴む」

ということわざがあるように、私たちは、自分の力ではどうしようもない困難に巡り合った時でも“とにかく何かにすがりたい”そんな想いに駆られますよね。

人間は科学の力を駆使して、この地球上で好き勝手に振舞っています。他の生き物同様に、「諸行無常」「生老病死」の法則から逃れることは出来ません。そんな人間にとって、神さまや仏さまは、最後の砦（とりで）とも言えるのかも知れません。

日蓮聖人は鎌倉時代という権力者絶対の時代の中にも、世の中を救うため、信仰の異なる権力者に向かって、法華経・御題目の重要性を強く訴え続けました。

その結果、命に危険が迫る「法難（ほうなん）（布教による迫害）」に何度も何度も遭ってしまいました。

そんな日蓮聖人の心・精神を支え続けたものは、唯一絶対の教えと言われる『法華経（妙法蓮華経）』の経文であり、法華経の魂とも言える「南無妙法蓮華経」の御題目だったのです。

聖人は、『法華経』の経文の中から、特に祈りの力が強い経文を抜粋して一冊の「祈りの経本」を作り、毎日この経文を読むことを心の支えとしていました。この、日蓮聖人が撰述した「祈りの経本」は、通称『祈禱経（きとうきよう）』と呼ばれています。

この『祈禱経』をお弟子さんに送った時に添えられた日蓮聖人のお手紙には、こう書かれています。

（現代語訳）

「私は毎日必ずこの経文を読んでいます。私が法華経への信仰を抱いてからは、この経文を通じて神仏に祈りを捧げてきました。何度も遭遇した法難も、法華経の経力とお釈迦様の金言力によって乗り越えることが出来たのです。

ですから、法華経を信仰し実践しようとする者は、決して信仰を捨てず、疑う想いも持つことなく、全てを法華経の力に身を委ねて修行すれば良いのです。そうすれば、来世での成仏は言うに及ばず、この世においても息災延命は疑いなく、大きな果報も得て、いずれば、法華経の教えが世界中に広がるようにという大願も叶うに違いないのです」と。

現実に日蓮聖人は、厳しい法難に遭つても「神仏に祈りを捧げ続け」奇跡的にその命が救われたのです。

伊豆沖の海上の岩に置き去りにされた時も、鎌倉の刑場で首を斬られそうになった時も、そして、極寒の佐渡で風雪が吹き込むあばら家に放置された時も…

それでは、その『祈祷経』の一部を、皆様に紹介してみたいと思います。

妙法蓮華経第二十三章にある「薬王菩薩」について説かれた章からの抜粋です。「薬の王」の菩薩なんて、なんだか縁起の良い名前だとも思いませんか。

以下、経文の読み下し文です。

「この経は、よく一切衆生(いっさいしゅじょう)を救い給うものなり。

この経は、よく一切衆生をして諸の苦悩を離れしめ給う。

この経は、よく大いに一切衆生を饒益(にようやく)して、その願を充滿せしめ給う。

よく衆生をして一切の苦・一切の病痛を離れ、よく一切の“生死(しょうじ)の縛り”を解かしめ給う。

この経は、すなわちこれ閻浮提(えんぶだい)の人の病の良薬なり。もし人、病あらんにこの経を聞くことを得ば、病すなわち消滅して不老不死ならん。」

いかなる苦悩からも私たちを救ってくださいさるといふ有難い経文であり、特に最後の二重線の箇所は、原文では

しきょうそくい えんぶだいにん びょうしろうやく  
『此経則為 閻浮提人 病之良薬』

にやくにんうびょう とくもんぜきよう びょうそくしやうめつ ふろうふし  
若人有病 得聞是経 病即消滅 不老不死』

という「二十八字」の経文で、日蓮聖人が、死が差し迫った自らのお母さんのために、この「二十八字」を紙に書いて燃やし、灰にして浄水で飲ませたところ、4年間命を長らえることが出来たと御文章で明らかにしています。

この『病氣平癒』の靈驗あらたかな経文を唱え、信仰心を養ってまいりましょう。

ただし、日蓮聖人が本当に伝えたかったのは、単に「法華経を信じれば病氣も治るよ」ということでは無いはずです。最初に書いたように、“生老病死”は人間という生物である以上決して避けられない宿命なのですから。

大切なのは、お弟子さんに送った手紙に書かれている、疑う想いも持つことなく、全てを法華経の力に身を委ねること。そして、そのことよって生み出される「偉大なる生命力」。そこにこそ、日蓮聖人の本意があったと私は思います。

病気に限らず大きな壁にぶつかった時、私たち人間は、自分の力ではどうしようもないと頭では分かっているけれども、あれこれ悩み分別し「藁（わら）でも掴もうと」もがきすぎてかえって溺れてしまいそうになる（自分で悩みを増やしてしまう）ことが多々あります。

そんな時は一旦もがくことをやめ、肩の力を抜いて、自然に備わる「仏様の救いの力」という「浮力」に身を委ねてみてはいかがでしょうか。

ほんの少しのところからでも、「あれこれ考えるのを止めてみるか」「仏さんに任せてみるか」と身を委ねた時、私たちの身体をグーっと浮かび上がらせる“浮力”が、仏様の救いの力が働き、私たち自身で浮かび上がる「偉大なる生命力」を与えてくれるかも知れません。

疑うことなく、強く信じて、実践してみませんか。

**南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、**と唱えながら…

合掌